

自然災害対策は、自治体のトップの責任である、と明記しておく。

東日本大震災の被災地、宮城県・大川小学校の被害についても、自治体・学校の事前防災の不備が問われた。大分の耶馬溪の土砂災害も、地元の人にきくと、以前から危険性は広く知られており、どのような予兆があれば危険かということも常識だったという。それでも、あれだけの被害がでたのは、そういった危険性に対し、地元自治体が対策をとらなかったためである。津波対策もそうだが、避難するのは住民ひとりひとりの意思でしかないが、ハザードマップ（被害想定図）を公表する自治体は、それにもとづき、住民に対し、いざというときに避難行動に移れるだけの取り組みを促す責任がある。



怨霊の聲が今は懐かしいNHK人形劇「新八犬伝」

話は変わるが、来年、「元号」が変わる。

元号の変更は現在、天皇が変わる時に行われるが、古来は、自然災害、疫病、戦乱などが起こった際、時の指導者である天皇が、人心を鎮めるため、行なわれた。昔なら、阪神大震災や東日本大震災などのあとには、元号は変わったのである。国家をあげてのそういった行為は、災害と向き合う、日本人の姿勢であったはずである。となると、「一世一元」は、実は、国家への危機感を共有することを妨げているのではないかとさえ思わざるを得ない。阪神大震災以来の23年の災害をみると、時にそうだろう。

かつて、坂本九さんの名調子で知られたNHKの人形劇「新八犬伝」があったが、原作の南総里見八犬伝は、長引く飢饉の末の領土争いのなかで起こった物語である。実際に、この時期、元号の変更が頻繁に行なわれていた。「一天にわかにかき曇り、真っ黒い霧の雲の中より、現われ出でたる怪しの影…」という坂本九のナレーションとともに、登場した、怨霊のおどろおどろしさ、目に見えぬ怖さを失った現代は、災害への構えが全くないに等しいということになりはしないか。

(平成30年4月)